



226号

2017 / 9 / 1

日中文化交流市民サークル「わんりい」
東京都町田市能ヶ谷7-32-12 田井方
〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100
<http://wanli-san.com/>
Eメール:wanli@jcom.home.ne.jp



「棗(なつめ)の季節」 棗は「一日に三粒の棗を食べれば歳を取らない」と言われ、美容によし、健康によしの漢方の食材として中国では古くから食されてきました。黄河を隔てて山西省と向かい合う陝西省延川県伏羲村は大きく、甘く、立派な棗の生産地として知られ山西省の棗商人が季節になると買い付けに来るほどです。(2001年11月黄河・河畔の伏羲村にて)

撮影・周路

「戦国時代、斉の国王は、友好国の燕の国が近隣の小国と戦った時、燕国を助けるために管仲に軍隊を預けて派遣しました。彼らは春に出発したのですが、思いがけず激しい戦いになってしまい、戦いが終わって帰国出来ることになった時には、もう冬になっていました。

軍隊はやっと帰国出来ることになって、喜び勇んで出発しましたが、途中、山の中で道に迷ってしまいました。随分たくさん歩いて、もう山を抜けるはずだと思ったのに、又見覚えのある処へ戻ってしまいます(登山やスキーで、道に迷い同じところを歩き回る、いわゆるリングワンデリングに陥ってしまったのです)。それを何回も繰り返したので、管仲は焦りました。でも彼はすぐ良い方法を思いつきました。軍隊の中で比較的年をとっている馬を何頭か、戦車から解いて自由にさせてやり、軍隊の先頭を歩かせました。自由になった馬たちは一斉に駆け出しました。軍隊がその後について走ると、間もなく山を抜けて街道に出て、無事に帰国することが出来ました。こうして管仲は軍隊を無事に帰国させたのでした」。

言葉の説明は、「歳をとった馬は道を良く知っていると言うのは、経験の豊富な人は、状況を良く知っているの、問題の解決をするにも的確な道筋を知っているということの喩え」となっています。

例文は、「このことは、ベテランの張さんが処理してくれたので、すぐにみんなが満足する結果になった。本当に、『老馬は道を知る』だね」となっていました。

日本語では「亀の甲より年の功」という言葉を、同じような意味で使いますね。私は実際に訊いたことが無いのですが、物の本に依れば、「イカの甲より年の功」という言い方もあるようです。確かにこちらの方が年の功を讃えるのには適していますね。亀の甲はべつ甲として珍重されますから、年の功と同等ですものね。

日本の諺としても、「老馬は道を知る」と言う句があります。しかし、「老馬」という言葉のせいでしょう

うか、面と向かった誉め言葉としては使われず、もっぱらその場にはいない方に対する誉め言葉となっているようです。

ここでちょっと、7月号で紹介した「一鳴驚人」について、再度お話をさせてください。

7月号わんりいの発送を終えて、皆様のお手許に届いたかなと思った頃に、会員の平島さんからお電話を頂きました。

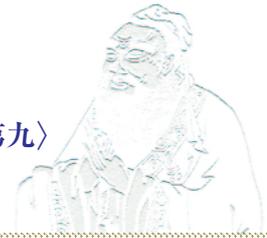
お電話で平島さんは、7月号のこの欄でご紹介した「一鳴驚人」が、斉の威王の話となっていますが、「この話は元々『史記』に載っている話で、春秋時代の楚の荘王の話として聞いている。戦国時代の斉の威王より楚の荘王の方が古いのだから、楚の荘王とする方が良いのではないかとご指摘くださいました。

私はといえば、もともと史記に出て来るお話であるのは知っていましたが、主人公の王様の名前まで覚えていなかったの、何も考えずに、本に書いてあることをそのままご紹介したのでした。ご指摘を受けて、慌てて調べてみたら、何と、史記にはこの同じ話が2回出て来るのだそうです。

一つは、平島さんのご指摘通り、春秋時代、楚の荘王(在位B.C.613～597年)のお話として、史記の世家列伝に出て来ます。王様のエピソードとして語られ、謎かけをした家臣は、申無畏とも伍挙とも言われています。もう一つは、本に出て来るように、戦国時代の斉の威王(在位B.C.356～320年)のお話ですが、こちらは世家列伝ではなく、滑稽列伝・淳于髡の項に載っているのです。つまり主人公は淳于髡なのです。そして、注釈に、「楚の荘王にも同じ話があるが、後世、斉の威王と淳于髡の話として語られることが多くなった」と出ていました。このせいで、この本では斉の威王の話として紹介されているのでしょう。

平島さんのご指摘のお陰で、知識が一つ増えました。ありがとうございました。



fǎ yǔ zhī yán néng wú cóng hū
法語之言，能无从乎？hōu gō gēn
法語の言は、能く従うこと無からんや〈子罕第九〉うえだ あつ お
桜美林大学名誉教授 / 孔子学院講師 植田渥雄

価値観は人により時代により、それぞれ違いがあつて当然ですが、時代を超えて、誰もが肯定せざるを得ない正しい言葉というものがあります。この表題にある「法語」とはそういった類のものです。「正言」「常言」と置き換えることもできます。「仁」とか「義」、今風に言えば「良心」とか「正義」などがこれに当たるでしょう。こういう言葉には従わないわけにはいかない。これがこの表題の意味です。

言葉は続きます。「改之為貴 (Gǎi zhī wéi guì) (之を改むるを貴しと為す)」。一般論、抽象論の域に留まる場合はともかくとして、具体的な事例が絡むと、そういう言葉は時として耳に痛く響くことがあります。当事者が公的な立場にあればなおさらです。公的な間違いが露見した際、人はどういう行動を選ぶか。非難する相手に土下座して謝るか。深々と頭を下げて反省の意を表すか。それとも長々と弁解を繰り返すか。いずれにしても正義と良心にもとる行為があつた以上、表立った反抗はできないでしょう。

しかし、犯した誤ちを表向き認めて謝ることは、以後の行動を改めることとは別問題です。いかに懺悔しようが弁解しようが、その結果が以後の行動に表れなければ何の意味もありません。「過てば、之を改むるに憚る勿れ」〈学而第一〉、「過(あやま)ちて改めざる、是を過ちと謂う」〈衛霊公第十二〉、「過ちを式たびせず」〈雍也第六〉も同様の意味合いです。

過ちを犯した場合、謝るべしと、孔子は一度も言っていない。謝るのは簡単だが、改めるのは難しい。しかしそれこそが大事なことだ。孔子はそうに考えていたようです。

言葉はさらに続きます。「巽与之言，能无说乎？ 绎之为贵。(Xùn yǔ zhī yán, néng wú yuè hū? Yì zhī wéi guì) (巽与の言は能く説ぶこと無からんや。

これ たず たつと な そんよ
之を繹めるを貴しと為す)。「巽与の言」とは婉曲な言い回しのことです。同じく批判であっても、婉曲に言われると耳に快く響きます。時にはこれが、過ちを犯した人に言い逃れの道を提供することもあります。こういう批判ならだれしも喜ぶことでしょう。ここでいう「説」は「悦」の異体字で、「よろこぶ」という意味です。「繹める」とは糸を引くこと、ここでは糸をたぐるようにして真意にたどり着くことです。婉曲な言い回しは耳に快いが、真意はわかりづらい。しかしそれをたどって見極めることが大事だ、と孔子は言っているのです。

そして言葉はさらに続きます。「说而不绎，从而不改。吾末如之何也已矣！(Yuè ér bù yì, cóng ér bù gǎi, wú mò rú zhī hé yě yǐ!)」説びて繹ねず、従いて改めず。吾之を如何ともする末きのみ)。快い言葉を耳にして喜んだり安心したりするが、その奥にあるものを見極めようとはしない。正しい言葉を聞いて神妙な素振りを見せるが、だからと言って自分の行いを正すこともしない。まさに暖簾に腕押し。そういう人たちに対して自分は一体何をしたらいいのだろう。「どうすることもできないなあ〜」。こう言つて孔子は人々に覚醒を促しています。「末」ここでは「無」と同じ意味です。

興味深いのは「也已矣」という最後の三文字です。何れも感動助詞で、格別の意味はありませんが、ここには言いようのない孔子のジレンマが秘められています。

差別は良くないと言いつつ、差別意識から抜けきれない人。原発は危険だと知りながら、原発をやめられない人。耳の痛い話ですが、孔子なら何と評したでしょう。

(わんりい「中国語で読む漢詩の会」講師)

今回の旅の2日目、2017年の5月11日(木)である。鞍山にある中国・東北地方四大名山の一つ「千山」に登る日が来た。四大名山については、'わんりい' 第222号(2017年4月号)に書いたが、改めて筆者との関わりを紹介すると以下の通りである。

- ①長白山2,691m(吉林省・北朝鮮との国境、2008年登山)
- ②鳳凰山836m(遼寧省・丹東市郊外、2016年登山)
- ③医巫閭山866m(遼寧省・錦州市、未登頂)
- ④千山(主峰=仙人台)708m(遼寧省・鞍山市、2017年登山)

今回で③を除いてすべて頂上に立ったことになる。①の高さはかなりなものであるが、頂上近くまで道路が整備されており、登山というほどのものではない。皆頂上の美しい火口湖を見に行くのである。勿論麓から登る人もいるが、時間を有効に使うとすれば安直に行くしかない。昨年は結構険しい鳳凰山に登ったが途中までロープウェイがあるのでそれほど大変ではなかった。しかし千山は一切文明の利器はなくてただ目の前の石段を一つ一つ登るので大変疲れた。来年か再来年には③に登って一区切りを付けたいと思っている。ちなみに中国の山は、泰山、北京郊外の盤山などで文明の利器を一部使ってはいるが10座近く頂上に立つことができた。

千山の謂れは、999の峰からなる山々の総称でほぼ千あるので「千山」と命名したという。それにしても根気よく数えたものである。古くは「積翠山」と呼ばれた。主峰は708mの「仙人台」である。千山の

多くは奇岩の山が多く、岩の白と緑のコントラストが美しく国家AAAAA(5A)級の観光地に指定され、「千山風景区」と呼ばれている。別名を「東北明珠」(東北地方の美しい真珠の意)とも呼ばれている。

私が大連勤務の時、「千山に登って来ましたが素晴らしい。総経理も一度登るといいですよ」と何人かの社員に言われたので、行くつもりにはなっていたがその機会がなく、10年後に実現することになったわけである。朝早く、中国人の友人が二人ホテルに来たのですぐタクシーに乗って大連北駅に向かった。この時間帯は流石に道は混まず6時半前には駅に到着した。まず鞍山駅までの切符を買ってもらう。片道129元である。7時17分発の高鉄なので構内

にあるケンタッキーに入り、私はコーヒーとハンバーガーを注文した。

以前ハルビンに行った時、定刻より5分早く高鉄が動き出した経験があるので定刻7～8分前に高鉄に乗り込んだ。今回は定刻通りに出発した。例によって時速300キロを超えるスピードでトウモロコシ畑の中を突っ走り、8時39分に大連から約300キロ離れた鞍山駅に到着した。近代的な大きな駅舎である。駅からはタクシーに乗り、途中今日宿泊するホテルに荷物を置いて、また千山に向



千山の最高地点「仙人台」。
奥の岩の中には観音様。

かった。千山は鞍山市の南東18キロメートルにある。さて前号で「鞍山市」は日本人に比較的なじみのある街と書いたが、改めて鞍山市の歴史を見てみよう。一定年齢以上の方には懐かしい街と思う。

鞍山周辺は、古くから鉄の産出で知られ現在は中国では最大の製鉄所があり、「鋼都」の異名を頂いている。鞍山は市の南方に二つの山が重なり、これが

馬具の「鞍」に似ていることからその名が付いた。人口は約350万人で省都の瀋陽市、大連市に次いで三番目に大きな都市である。したがって車のナンバープレートは、「遼C-0000」となる。“遼”は遼寧省、“C”はアルファベットの序列3で、遼寧省第3番目の都会鞍山市という意味である。鞍山の製鉄の歴史は古く、前漢の武帝(B.C.156～B.C.87年)時代には鉄鉱石の採掘と製鉄を始めている。唐代に製鉄業が発達している。近年に到り1905年の日露戦争後、この地を支配した日本は南満州鉄道(満鉄)を設立した。この満鉄が鞍山付近で鉄鉱石の大鉱脈を掘り当て、近傍の撫順(遼寧省)で石炭が産出することにより、1918年に鞍山製鉄所を設立した。砂鉄くらいしか採れない日本はここで生産した鉄鋼をあらゆるインフラや兵器の生産に活用した。1945年の敗戦後、ソ連は製鉄所設備を運び去った。ソ連という国はさらにシベリアにかなりの日本兵を強制連行し極寒の地で何年もの間、強制労働させたが、とにかく略奪が得意の国である。1949年中華人民共和国になって、この地は鞍山鉄鋼公司として再建され新中国の最初の大型鉄鋼コンビナートに生まれ変わったのである。

タクシーは一路千山に向かって走っている。友人の話では今から行く登山口は、運転手の話で入場料が要らないということであったが、そこに到着すると係員から結局一人30元支払わされた。友人はここが仙人台に登る登山口だと説明してくれた。歩き始めると嬉しいことに〈柳絮〉が飛び始め、私たちを歓迎してくれるように感じた。天気は抜けるような青空で空気もおいしく感じる。初めのうちはよかったが、登山道はすべて石段で、二十数段登り切ったと思うとまたそこから二十数段くらいの石段が右に折れたり左に折れたりして現れるという繰り返しである。しかも周囲は同じような風景ばかりでさすがに徐々に足が重くなっていった。と言っても降りるわけにもいかずスポーツドリンクに助けられながら頂上を目指した。このルートはほとんど人と出会わず、本当にこの道でいいのであろうかという疑念がよぎる。その疑念を振り払いつつ一歩一歩登っていくと、ついに頭の上あたりで人の声が聞こえてき



「千山風景区」の入場門

た。足に力が加わり岩と岩の間の道を登りきると、10数人の人が休んでいてようやく頂上に着いたと分かった。頂上には〈仙人台〉と書かれた石碑があり、「千山第一高峰・海拔708.8米」と刻まれている。そのそばで若いカップルが自撮棒を前に突き出して何枚も記念撮影をしていた。

頂上は8畳一間くらいの広さがあり、奥の方は岩の洞窟がかぶさるよう存在を誇示している。前面には年寄り夫婦が毛氈をひろげ小物を売っていた。周囲は金属の柵が設置されているが、そこには赤い布がたくさん取り付けられている。そしてそこここに中国の国旗がハタめいている。なにもこれほどの国旗を掲げなくてもよさそうなものを、と思う。エベレストの山頂なら分かるが……。洞窟の奥には「南無観世音菩薩」と書かれた観音様が祀られており、皆そこにいて線香を求め三拝九拝している。708mの高さしかない頂上からの眺望は素晴らしい。周囲にこの山より高い山がないので当たり前といえばそれまでであるが、重畳たる998の峰が見渡せる観光地はそうはないのではあるまいか。名前の知らない花が咲き乱れ、まだ見たことはないが浄土(?)の雰囲気醸し出している。

我々はスマホにしっかり景色をおさめて山の反対側を下ることにした。お腹も少しすいてきたので絵葉書や観光案内に掲載されている大きな入場門(正門)に行きそこで昼食を摂ろうということになった。下りも石段が延々と続き、登りよりはマシであるが、最後には膝ががくがくしてきた。やはり登山道は土の道に限る。そして我々は写真で見たことのある巨大な入場門に到着した。

(続く)

▶敗戦後5年目に発行された『ザメンホフ』

エスペランティスト伊東三郎については、由比忠之進の友人として、また本誌で何度か岩波新書『エスペラントの父 ザメンホフ』の著者であることを記したことがあります。これから何回か伊東三郎について書いてみたいと思います。

今、私の手元に伊東の著書『ザメンホフ』があります。奥付を見ますと、1950年4月10日第1刷発行、そして1997年11月19日第9刷発行と記されています。何回かの引っ越しや自宅の改築などで所蔵していた本も、残念ながらその多くは古本屋へ行ってしまい、この『ザメンホフ』も二回ぐらいは新たに買い求めたのではないのでしょうか。

初版が1950年、日本の敗戦後5年目の年です。焼け跡闇市時代の残り火がまだ色濃くあった時代、人々は活字に飢え、知識人と言われる人々だけでなく、多くの人々がむさぼるように本や雑誌に飛びついていた時代です。

▶戦前、何度も獄中に入った伊東

1902(明治35)年生まれの伊東は当時48歳。いわば男盛りの時でした。軍国主義日本の時代に辛酸を舐めた伊東は、「民主日本」の登場に小躍りし、思う存分活躍できる時代をことのほか喜んだことでしょう。

著書『ザメンホフ』の〈あとがき〉の冒頭を伊東はこう書いています。

「本當のザメンホフ傳を書けと求められて、年月がたちました。戦後の若い世代はその名前さえも忘れており、長年のエスペランティストは偶像にしてしまいこんでいます。しかし、ザメンホフの生涯こそは今日のわれわれにとって深い教えに富むと思います。わたしはザメンホフの『傳』(vivo)を通して知識のみではなく、その人の「生命」(vivo)を伝えねばならないのです。本當の『傳』は、

くわしく調べ、たくみに描き出し、または、ただこの上なくほめかざることはちがいます。求められている他人ごとでないvivo傳はわきからの見物人やただの研究者ではむずかしいし、ただの信者や弟子にはなおさらできないことでしょう。

むかしからよく、師の道をあゆみ、ふみこえなければ師の生命を伝えることができないといわれます。わたしがその本當のvivoを伝え得るものとはいえません。それは多くの力の共同によらなければなりません。かれの生命は共同にあるのだから……。わたしはただ力及ばずとも力をつくすのみです」

▶ひとりではなく「共同の力」で

この〈まえがき〉の最初の文章からも伊東の性格がよく出ています。決して自己を過大に表出することなく、「多くの力の共同によらなければなりません」と記したように、自分だけでなく、多くの人たちの共同の力が本書を生み出したのだと彼は書いているのです。事実、先に紹介した〈まえがき〉の次の段落で「このザメンホフ傳は多くの人々の協力と助けによってでき上がりました」と記しています。

伊東は岡山市に磯崎高三郎、^{きえ}長枝の長男として生まれました。幼少の頃より外国への関心が強く、叔父・^{あきら}磯崎融と古美術商のエスペランティスト瀬崎達太郎の会話からエスペラントのことを聞き、

いたく興味をそそられ、岡山中学に入学するやエスペラントに熱中しました。

1921年、19歳の時、青山学院職業科に入学し、「1年上の松本正雄と青山学院エスペラント会の発展をはかり、SAT(全世界無国民協会)の会員になる」と年賦(『伊東三郎 高くたかく遠くの方へ 伊東三郎遺稿と追憶』(渋谷定輔・埴谷雄高・守屋典郎編 土筆社刊)に記されています。

第十八回 清貧な理想主義者 伊東三郎
ジャーナリスト、方正友好交流の会事務局長、著書『ある華僑の戦後日中関係史』
大類 善啓(おもしろいよしひろ)

この著作は1969年の伊東の死から5年後の1974年、伊東の遺稿や書簡、友人知人たちの伊藤を追憶する文章などをまとめた600頁の大著です。

またSATは正式には、Sen-naci-ec-a Asocio Tut-mondaと言います。1921年、ランティという人がつくりました。国民という概念を否定して人々は人類の一員なのだという考えの下に結成された世界的な組織であり、SATがまず主張するのは、「独立した単位と考えられているすべての国家と国民をなくす」というものです。ちなみに私は、大してエスペラントを話せない語学レベルでは初心者に過ぎませんが、SATの会員です。日本でSATの会員は本当に少数で100人にも満たないようですが私は、SATをザメンホフの思想を体現した組織だと思い参加したのです。SATについてはいずれまた詳しくお話しすることがあるでしょう。

➤二つの学校を中退し農民運動へ

伊東は青山学院を早々に中退し、大阪外国語学校(大阪外大)仏語科に入学しますが、そこも中退して、故郷の岡山へ帰りました。一説には、大阪市電大争議で学生がスト破りに雇われることに反対し、「学聯」の名において闘争して大阪外国語学校から追放されたとも言われていますが真偽は不明です。

23歳になって大阪市立盲学校の講師となり、英語とエスペラントを教え、また大正日日新聞社主催のエスペラント講習会では、大本(教)本部の伊藤栄蔵とともに講師を務めました。

大本教では、出口なお、その娘婿である出口王仁三郎という二人の教祖、詳しく言えば大本信徒たちは、なおを開祖、王仁三郎を聖師として親しく呼び師事しています。その聖師・王仁三郎は強くエスペラントを支持し、今なお大本信徒にはエスペラントを学習する人たちが少なからずいます。

さて伊東は、翌1926年、労働農民党に入党、大阪府連書記長代理になりました。労農党は日本共産党の指導の下、日本農民組合、日本プロレタリア

芸術連盟などが統一して日本の山東出兵に反対した時、対支非干渉同盟を組織しました。この間、伊東はたびたび逮捕され、盲学校の教え子から差し入れを受けていたこともあったようです。

➤埴谷雄高と出会う

1930年、28歳の頃、伊東は日本共産党に入党したとされています。主に農民運動の指導に当たり、般若豊(本名)と知り合うようになります。1960年代、多くの左翼青年に影響を与えた、後の埴谷雄高(筆名)です。埴谷は『死霊』という哲学的な小説、そして多くの政治評論を書き続け、1960年代の学生運動、とりわけ日本共産党と一線を画す左翼青年や文学青年らに教祖的存在として崇められるような存在になりました。私も埴谷の著作を読んだ一人で、とりわけ『幻視の中の政治』には大きな影響を受けましたが、伊東の口から埴谷の名前を聞いたことがありませんでした。しかし、清貧暮らしをしていた伊東を陰ながら支援していたようです。

伊東は何度も逮捕され拘留所暮らしをしました。が日本の敗戦後、友人たちの勧めもあり、『ザメンホフ』を刊行し、その後もエスペラントをいろいろな所で教え著作活動もしましたが、とりわけ世間的に有名であったわけではありません。しかし小さなエスペラント界では著名な人物でしたが、1969年に亡くなりました。前出の『遺稿と追憶集』から、1969年そして1970年の項をそのまま紹介してみましよう。

「1969年67歳1月、健康を害して病臥中、身近に東大闘争起こり、事態の重大さを深刻に考える。2月28日発病、永川下セツルメント病院に入院、3月7日午後10時20分死去。9日、本郷の自宅にて葬送。5月、熊本県鹿本郡内田村の宮崎家の墓地に埋葬。

1970年 3月18日、第23回解放運動犠牲者追悼会で、青山の無名戦士の墓に合葬」

と記され、年譜はそこで終わっています。

東西文明の比較 (17)

陽光新聞社・顧問
塩澤宏宣

今回はタイムリーな話題から始めたいと思います。7月9日のことです。

神宿る島「宗像・沖ノ島と関連遺産群」が、世界文化遺産に登録されました。宗像大社の沖津宮である沖ノ島、九州本土に近い大島の中津宮、本土の辺津宮、沖津宮遥拝所、新原・奴山古墳群などから構成されています。古代からの信仰を今に伝える島の価値が認められたのでしょうか。島で祭祀が始まったのが4世紀後半で、前回(16)の本稿で述べた「倭の五王」の時代です。沖ノ島は九州と朝鮮半島のほぼ中

間にあり、日本書紀が宗像三女神を「海北道中の道主貴(みちぬしのむら)＝朝鮮半島航路の守護神」と位置づけていることから、大陸への航海安全を祈る祭祀が営まれていたようです。遺跡跡は、巨岩に隣接されており、古代人が岩に聖性を見いだした一例がここにも見られます。

沖ノ島は、1954年から発掘調査が行われ、金製指輪・金銅製馬具・ペルシャ産のカットグラス・「卑弥呼の鏡」と言われる三角縁神獸鏡など、8万点にも及ぶ奉獻品が出土しました。これらは全て国宝に指定されています。

残念なことに、沖ノ島は女人禁制で、男性も年に一度の現地大祭でわずか200人しか入島できないそうです。発掘された8万点の国宝は、宗像大社辺津宮境内の神寶館で見ることが出来るようです。私も年内には見学する予定です。

アメリカ大陸の文明

拙文のテーマは「東西文明の比較」です。つまり、古代日本の文明は、中国を中心とした隣国を通じて、遠くヨーロッパの文明をも取り込み発展したことを

再認識することが目的です。しかし、戦後70余年を経過して見回してみると、日本文明はアメリカの影響が強く反映され、すっかり様相を変えてしまったことに気がつきます。

終戦直後に小学校に入学して、「進駐軍」による教育を受けた私は、何の疑問も感じないままに過ぎてきたことに、今になって反省しています。言うまでもなく、ここで言うアメリカ文明とは、20世紀から隆盛したアメリカ合衆国をいいます。しかし、アメリカ大陸の文明は、日本の縄文時代とほとんど同時期に始まっていたのです。興味深いことは、他の文明と「交流」がないまま、数千年を経てきたことです。更には言えば、祭祀を行い、神殿建設や各種の用具など、エジプト・ローマ・ユーラシアなどと同様な文明を築いています。人類が持つ本能の素晴らしさに驚嘆せずには居られません。

アメリカ文明の始まり

アフリカを起源とする現生人類は、4万年前に世界中に分散を始めました。アメリカ大陸へは長い年月を経て、アジア北東部からアリューシャン列島・アラスカを経由して到達しました。1万5千年前のことです。約2万年前の氷河期で水位は低下。その結果、ベーリング海峡は地続きとなり、バイソンやトナカイなどが移動し、狩猟する人間もそれらに続いて移住しました。アメリカ大陸に最初に移住した民を「クローヴィス」人と呼びます。彼らが残した尖頭器(石の槍先)がアリゾナ州で発見されました。クローヴィス尖頭器といい、全米各地で発見されています。1万2000年前ごろには、クローヴィス人とその子孫は北米全土から南米最南端に到達していたようです。やがて気候は温暖化し、水位が上昇してアジア大陸との往来は出来なくなり、それ以降、16世紀のヨーロッパ人の到来まで、アメリカ大陸は独自の発展を遂げるのです。

広大な大地に展開したアメリカ大陸文化の足跡の研究は、出発したばかりと言われており、余り参考書がありません。この文もわずか数冊の書籍からの

拾い書きです。

メソアメリカ文明とは

メキシコ及び中央アメリカ北西部とほぼ重複する地域で、共通の特徴をもった農耕民文化ないし様々な高度な文明(マヤ・テオティワカン・アステカなど)が繁栄した文化領域を指し、パウル・キルヒホフ(ウィキペディアで参照ください)の文化要素の分布研究により定義された地域を指します。地理的には、北はメキシコのパヌコ川からシナロア川あたりまで、南はホンジュラスのモタグア河口あたりからコスタリカのニコヤ湾あたりまでですが、この境界線は歴史的に一定していたわけではありません。壮麗な神殿ピラミッドなどを現在も残す繁栄した地域です。

メソアメリカでは、

- 定住農村村落の成立(紀元前2000年以後)
- オルメカ文明(メキシコ湾岸; 紀元前1250頃～紀元前後)
- テオティワカン文明(メキシコ中央高原; 紀元前後～7世紀頃)
- マヤ文明(メキシコ南東部、ユカタン半島、グアテマラなど; 紀元前3世紀～16世紀)
- トルテカ文明(メキシコ中央高原; 7世紀頃～12世紀頃)
- サポテカ文明(メキシコ・オアハカ地方; 紀元前10世紀～16世紀)
- ミシュテカ文明(メキシコ・オアハカ地方; 900～1522年)
- タラスカ王国(メキシコ西部地域、ミチョアカン州など; 14世紀初～1530年)
- アステカ帝国(メキシコ中央高原; 15世紀前半～1521年)

などが興亡しました。

これらの文化はアジア、ヨーロッパ、アフリカの三大陸の文明との交流を経験せず、地理的に孤立した環境で発展しました。そのため製鉄技術を知らず、宗教においても独自の体系を成立させるなど、他大

陸の文明とは際立った特徴を有しています。

神殿文化は紀元前二千年紀の末に起こり、それから約2500年の間、外部世界の影響や干渉を受けることなく自力で発展し続けました。ところが15世紀の末、コロンブスに率いられたスペイン人が突然侵入し、それらを破壊し尽くしたことは、皆様ご承知のことです。

アンデス文明・インカ文明

アンデス文明を考えると、その特異な自然環境に注目しなければなりません。南米大陸の太平洋側には6000m級のアンデス山脈が、南北7000km連なっています。この中央アンデス地帯と呼ばれる地域は、乾燥した砂漠地帯の海岸域(コスタ)、山々が連なる山岳地帯(シエラ)、その東側に広がるアマゾン原流域の熱帯雨林帯(モンターニャ)の三つに大別されます。コスタは、沖合を流れるペルー海流が年間を通じて低温のため、水分の蒸発が少なく、結果、海岸域を乾燥させます。ペルーの首都・リマの年間降水量は10ミリ台です。ちなみに新潟・富山は暖流が流れるため、蒸発する水分は豊富で年間降水量は2000ミリを超えます。ペルー沖は水産資源にも恵まれています。世界有数の漁場です。この漁場の存在は、文明の展開と密接な関係があります。コスタは漁労による人々の定住化をもたらしました。

コスタで獲れた魚は、内陸部の丘陵地帯へも運ばれました。自然環境で見逃せないのはエルニーニョ現象です。赤道直下のペルー沖合では、海流の北上する力が弱まると、赤道反流が力を強めて南下しはじめます。これに伴って水温の高い赤道反流は大量の水蒸気を発して雲をつくり、乾燥砂漠地帯に激しい豪雨をもたらすのです。洪水によって生態系が変わってしまうほどの災害をもたらす、栄養分を豊富に含んだ土を押し流し、農業生産力を低下させることもしばしばあります。自然と共生した点では、日本文明と共通するところがあります。

次号もアンデスについて記す予定です。

虞美人・春花秋月何時了(李煜)

報告:花岡風子

今日のお題は李煜の〈詞¹⁾〉〔虞美人〕でした。〈詞〉は歌謡文芸の一つで、今も中国では多くの人々に親しまれています。宋代に特に栄えたので宋词とも言います。

何百種類もあるメロディーに合わせて作詞するもので、メロディーの一曲一曲に平仄など作詞法が細かく定められています。句の数や各句の字数もメロディーごとに定められています。したがって作品の長短もメロディーによって異なり、短いもので16字、長いものでは200字を越えます。作者は好みに応じてメロディーを選び、まるで替え歌を作るように歌詞を充てはめていきます。歌詞を充てはめるので〈填詞²⁾〉とも言います。

今回取り上げた作品は〔虞美人〕という名称のメロディーに、李煜が歌詞をつけたものです。数ある李煜の作品の中で最も有名なものの一つです。〔虞美人〕と言えば『史記』で有名な項羽の愛人を連想させますが、ここではメロディーの名称の一つで、作品の内容を表わすものではありません。メロディーの総称は、一般に〈詞牌³⁾〉と呼ばれています。

さて、作者の李煜は五代十国時代、今の江蘇省、江西省、福建省を中心に、三代にわたって地方政権(十国のうちの一つ)として栄えた南唐の最後の国

主でした。中国では李後主と呼ばれ、知らない人はいないくらい有名な人物です。その特異な生き様と文才は、長い中国の歴史の中でも、特に際立った存在です。

当時の南唐は長江の下流域に位置し、豊かな自然に恵まれ、経済面では最も栄えた地域でした。李煜はその恵まれた境遇を背景に、芸事にふけり、硯や紙などの高級文具や骨董品など美術工芸をこよなく愛し、多くの宮女たちに囲まれて耽美の世界に遊ぶ日々を過ごしていました。一方、政治能力は全くないというダメ君主でもありました。しかし、文人としての才能は卓越しており、詩や書画、音楽に通じていました。特にこの〈詞〉というジャンルにおいては他に並ぶ者がなく、今に伝わる作品は李白や杜甫に比べて、数こそおおくありませんが、不朽の名作として愛唱され続けています。

この李煜、生まれたのは937年7月7日、亡くなったのも978年7月7日……。[937年といえ、盧溝橋事件のちょうど千年前ですね。七夕の日でもあります。最後は諸説あるけれど、975年の暮れ、宋軍の侵入を受けて、首都南京から宋の都、汴梁⁴⁾に拉致され、2年半余りの軟禁生活の後、42歳の誕生日に毒殺されたというのが通説らし

虞美人

李煜

春花秋月何時了，
往事知多少。
小楼昨夜又东风，
故国不堪回首月明中。
雕栏玉砌应犹在，
只是朱颜改。
问君能有几多愁，
恰是一江春水向东流。

虞美人

李煜

春花、秋の月、時は過ぎ逝き
諸々の遠き思いは果てしなく
昨夜また、囚われの身に東風来る
在りし日の都の空は、仰ぐに堪えず、月明かり
金玉の館の後は、思うに昔と変わらねど
ただ窺れしは、この姿
幾何の憂い有りやと人問わば
東に流るる春水の、漲る如しと我は答えん

い。」と植田先生。

私の愛読書の陳舜臣著『小説 十八史略』にも「誕生日の祝いに」と出された酒に猛毒が盛ってあったとありました。『小説 十八史略』に描かれていた李煜の人生や作品は多分に芸術的でロマンチックなので何となく好意を抱いていましたが、中国でも李煜好きは特に女性に多いとのこと。テレサテンも、李煜の〈詞〉〔乌夜啼〕〔无言独上西楼……〕を現代風にアレンジして、素敵に歌っています。

「こんな男が側にいたら女性は大変だと思いますけどね～」と植田先生。「この作品も最後まで、敵国に軟禁された生活は耐えられないと言いながら、昔は良かった、と思い出に浸って、自分の憂いをひたすら美しく歌い上げていますね。グチも李煜の詩才にかかると芸術になってしまいます。自国が戦いに敗れて悔しいとか、人民はその後どうなったかななどの言葉は一切出てきません。ひたすら、やつれ果てた自分の姿をいとおしみ、昔の自分はイケメン（紅顔）だったなどとグチっています。ことほど左様に、社会性の欠如したナルシストの典型なのですが、それとわかりながらも、読者は、哀愁を帯びた華麗な作品世界に引きずり込まれてしまいます。女性には特に人気がありますね～」。

なるほど、国を滅ぼした芸術家のナル男くんはそれでも、最期まで美の中で自己陶醉していられたということですね。確かに政治的にも社会的にも困った君主ですが、それはそれで素晴らしいと言わざるを得ません。父の中主李璟りけいと共に、その作品は《南唐二主詞》に収められ、中国では超有名な詩人として千年以上の歴史にその名を刻んでいるわけですから。

ひと通りの人物紹介の後、この詩の情景を想像しながら、参加者全員で繰り返し朗読練習をし、中国語の響きに浸りました。

その後だいたいこんなメロディーだったろうということで、残された譜面をもとに、植田先生が歌ってくださいました。5音階の、哀調を帯びた、気品のある繊細な曲のように感じました。

もともと〈詞〉とは宮廷の妓女たちが歌や踊りを

権力者に提供したもので、女性らしい繊細さが特徴なのだそうです。その後、時代が下って、宋の蘇軾そしやく（蘇東坡）が三国志の歴史を歌い込んだ男性的な〈詞〉を作りました。メロディー、即ち〈詞牌〉の名は〔念奴嬌ねんぬきょう〕といいます。その内容は、本来の女性的な「婉約派」に対して「豪放派」と呼ばれるそうです。

メロディーそのものは時代とともに次第に廃れていきましたが、〈詞牌〉と、その〈詞牌〉ごとに定められた作詞法は後世にも受け継がれ、今も愛好者が絶えません。毛沢東もこのジャンルが得意で、革命を〈詞〉に歌い込んでいます。

最後にまた皆で李煜の人生について語り合いました。「囚われの身で三年近く幽閉され、42歳で亡くなったわけですから、生涯青春だったかもしれませぬね」。ポツリと仰った植田先生の言葉が妙に腑に落ちました。

何時までも若いつもりでいる今の私も、いつの間にか李煜の年齢を越えてしまいました。時々十代の頃の自分を思い出すと、その頃の感覚はまだ新鮮に思い出せるのに、あれから30年も経って、どうあがいてもオバサンの域にはまり込んだ自分に違和感や驚きすら感じる私……。

李煜は皇子として、生まれた時から宮廷でチャホヤされて育ち、やれ芸術だ、美女だ、音楽だ、という生活を40手前まで送ったのですから、正に生涯青春の思い出しかなく、寂しい幽閉生活で自分の精神を保つには、昔の思い出に浸る他はなかったのではないのでしょうか？

ということで、ある意味やっかいなナル男とわかっていても最後はやっぱり同情してしまった自分に苦笑です。何処と無く太宰治好きを彷彿させる李煜ファン。結構多いそうですよ。

■注

- 1) 詞（ツ）：日本語の読みでは〈詞〉は詩（し）と同音であるため、区別しやすく中国語音から（ツ）と呼ばれることがある。
- 2) 汴梁べんりょう：現在の河南省開封市。古く大梁、汴京、東京とも称し、中原の政治、経済、文化の中心として、五代の4王朝と北宋の首都であった。

黄土高原に咲く目にも彩なる花々・剪纸 II

第1章 高鳳蓮の生い立ち 陝北黄土高原の生活

文と写真 周路

翻訳：有為楠君代

陝西省延川県地方は、陝北黄土高原のど真ん中で、平均海拔は1000メートルになります。黄土の高原の中を、深い谷が縦横に走り、現地の人が「溝」と呼ぶ、無数の深く小さな流れが皆、西から東へと延び、その先にある川へと流れ込んでいます。川は合流する度に大きくなり、やがて北から南へと流れる大きな河となります。小さな流れは高原の土を運び、高原の土を含んだ水が集まって、黄色い水が滔々と流れ、人々が「黄河」と呼ぶ大河に流れ入ります。

陝北地方の《信天游》と言う民歌は「太陽が黄土を干し上げ亀裂を作り、雨水がその亀裂を谷にする。風が地表を削り吹き飛ばす。陝北はこのようにして作られた」と、その成り立ちを語っています。

延川県は隋の時代には既に存在し、1400年以上の歴史がありますが、剪纸芸術はそれよりも古いのです。その起源は、招福・厄除け祈願の民族風習です。農耕文化の中で生まれ、主として女性が受け継いできた民間芸術です。延川地区には、中華民族の始祖である伏羲が長く活動の拠点としたとされる遺跡があり、この地で八卦を考案したと言い伝えられています。



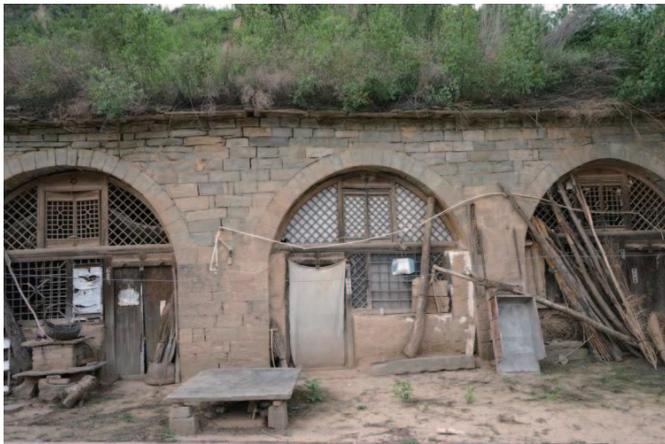
陝西省北部の黄土高原地帯はあちこちに地割れのような深い谷が刻まれてる

悠久の黄河文明に育まれたこの地では、剪纸の題材が豊富で、神仙仏像・吉祥図・農作業・伝統行事・人物・民話伝説・鳥獣花卉等、身の回りのあらゆるものが取り上げられ、素朴な中でも、伝統に裏打ちされた細やかで、作る人の情熱が迸る図柄が多く見られます。剪纸は、窓飾り・壁飾り・天井飾り・行燈などに使用されており、剪纸そのものが北方農耕社会の縮図であり、人々の生活を垣間見ることが出来る大パノラマだと言うことが出来るでしょう。

延川地区は、黄土高原のど真ん中に位置していますので、交通の便は悪く、政治・文化の中心から遠く離れています。しかし悠久の黄河の流れが、北方各地各民族の文化・風習・人情の取り込みに大きな役割を果たしました。歴史的に多くの国家が興亡を繰り返しましたが、政治的な交代や、平和時には穏やかな交流によって多民族の融合が図られ、現在の多元的で豊富な民族文化が確立されました。延川県周辺は、自然の「気」が集まって、優秀な人材を育み、文才すぐ



毎年春節 15 日はヤンガー隊が繰り出されてにぎやかに踊る



高鳳蓮さんが幼年時代を過ごした窑洞(ヤオトン)

れた人材を輩出すると言われ、歴史的に「文出両川、武出三边」との言葉が存在します。「両川」とは現在の延安市宜川県および延川県を指し、「三边」とは榆林市の定边・安边・靖边を指します。地域的にも、歴史的にも多くの偉人を排出していますが、最近特筆すべきは、文化大革命の時代、文安駅郷梁家河村に下放された習近平が、国家の指導者の一人となっていることでしょう。

朝、太陽が黄土高原に顔をのぞかせ、延川県文安駅鎮白家塬村を照らし始めた頃にはもう、この村に住む高鳳蓮は、彼女の剪紙芸術館の掃除を始めていました。高鳳蓮芸術館は、彼女の家の庭に建てられていて、8穴並んだ窑洞の中の6穴を使って、彼女の剪紙・布画の作品を展示しています。ここに展示されている一連の作品の全ては、中国農村のごく普通の主婦が「中国第一の剪紙技能者」と称され、国連ユネスコと中国民間芸術家協会の連名で「剪紙芸術名人」に指名された高鳳蓮その人が、この地での60年余りの年月の中で制作したものです。

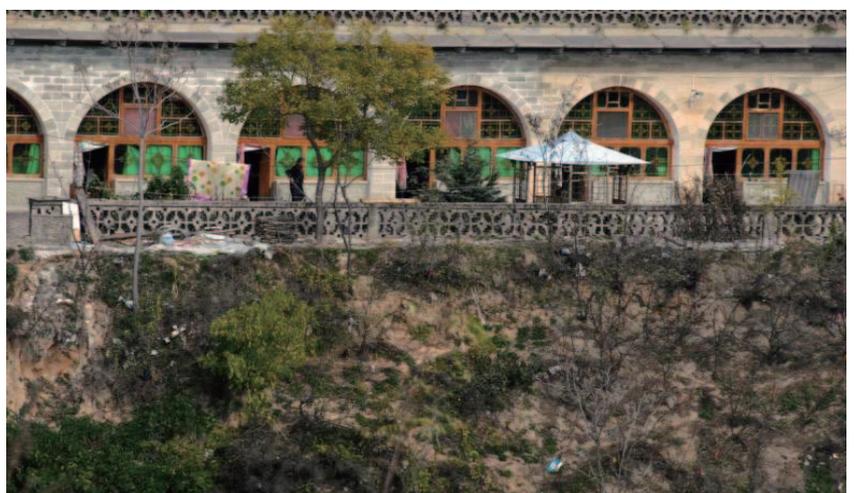
高鳳蓮は、1935年2月、延川県の東北のはずれ、黄河に近い高家圪台郷と言う村で生まれました。彼女の母親の話では、生まれると直ぐ丸一日泣き続けたそうで、祖母は「生まれたばかりであんなに泣くなんて、おおきくなったら、気性の激しい子になるだろう」と言いましたが、母親は、「この子は、他の子供と違う。きっとすぐれた

人間になるだろう」と思いました。

高家は、この一帯の豊かな地主で、家は石造りの窑洞で、庭には黒い石板が敷き詰められていました。祖父の家の前には、威風堂々とした一對の石の獅子が置かれ、その首には珠の首飾りを掛け、口の中には宝珠を含んで、日夜屋敷を護っていました。その獅子は、石の産地に特別注文して造らせたものでした。しかし、父親の代になると、家運は徐々に傾き始めました。高家圪台村には、黄河の渡し場があり、県城へ通じる街道があります。黄河の渡し場は限られたところにしかないので、渡し場があると交通の要衝となり、戦争ともなると、地域の被害は大きくなります。

往時の勢いを失ったとはいえ、やせ衰えてもラクダは馬より大きいと言われるように、高家の広大な屋敷は、戦争の度に各軍隊が食堂や、宿舎として必ず徴用する場所でした。特に、1947年、革命期に中華民国軍の胡宗南部隊が黄河を渡って、延安を襲撃した時は、丘の上も川筋も、まるでイナゴが大発生したかのように、黄砂を巻き上げて進軍して来た兵士たちで埋め尽くされてしまいました。こんな状況は、それまで見たことがなかったので、人びとは家を捨て、家族で親戚を頼って避難しました。高家は多少の財産があるので、父母は残って家を護り、12歳の高鳳蓮が8歳の弟を連れ、羊の群れを率いて山の奥に隠れて、軍隊が立ち去るまで息をひそめていました。

解放後は、当時の状況から見て、学校に入って文



現在の高家は、八穴が並ぶ石造りの立派な窑洞(ヤオトン)だ

字を学ぶことは出来たのですが、高家の家訓は厳しくて、経済力が衰えたとは言え、昔からの三従四徳(女性は親・夫・子に従い、品德を保ち・言葉を慎み・容姿を整え・家事に励むという四徳を備えるべし)の教えを守り、学校へは行かせてもらえませんでした。女性は能力の無いのが徳、儒教の教えを護れ



生涯労働に明け暮れた高鳳蓮さん

ば良いとされ、部屋の中で針仕事や手芸をしながら、嫁入り後の家庭の維持・子育ての知識を学べば良いと言われて育ちました。しかし、小さい時から枠には収まらず、ずば抜けて賢い少女だった高鳳蓮は、針仕事にもすぐに熟達し、手早く仕上げては余った時間で鋏を使い、何でも目に付いたものを切り出しました。豚・猫・スズメ等題材は何でもよく、臨機応変にその場で見たものを切り出しました。この時の剪紙は、単なる興味・趣味で切り出されたもので高鳳蓮自身の少女の夢を切り出していただけでした。

高鳳蓮の母親は、一般的な陝北のおばあさん同様、剪紙が上手で、衣服や布靴の模様を沢山作りました。賢くて手先の器用な母親が切り出す模様は生き生きとした迫力がありましたので、村で葬式や結婚式がある時はいつも手伝いを頼まれて、吉祥飾りや美しい草花を剪っていました。隣人や親戚の人達は、普段でも事ある毎に彼女に剪紙を依頼するのでした。そんな中で、高鳳蓮も知らず知らずのうちに影響を受けましたが、彼女の剪紙には彼女独自の雰囲気があるものでした。紙が十分ではないので、古い対聯(ついでん 対句を記して門の両脇などに貼る)を剥がして使いました。伝統的な窓飾りや靴の模様を練習する傍ら、高鳳蓮は、何やら抽象的なものを剪り出しましたが、それらには活力がみなぎっていました。

今は老人となった高鳳蓮ですが、彼女は昔から自分の剪紙を、これは何、あれは何と説明はしません。自分の娘に対しても同じ態度で、自分で理解し創り出すことが大切だと考えています。彼女は常々

言います。「教えられて剪った形はそれだけのもの。自分で見つけだした形は生きている。自分で技を磨いて剪り出してこそ生きた形になる」。

若い時から、高鳳蓮は強い人で、農作業は全てこなし、空いた時間には鋏を握って放しませんでした。彼女には剪紙の先生はいません。小さい時から鋏

を使うのが好きで、家畜に作業をさせた時は家畜を剪り、雪が降れば雪の花を剪るといった感じで剪紙を楽しんでいました。始めたばかりの頃は決し上手くはありませんでしたが、練習を重ね、工夫を凝らしているうちに、鋏が自在に使えるようになり、歳を経るにつれて、彼女の感性が剪紙に溢れ出てくるようになり高鳳蓮独自の芸術性が醸成されだしました。

剪紙は、延川地域で先祖代々受け継がれて来た生活の一部分です。村中を巡って、家々のオンドル飾り・天井飾り・テーブル飾り・結婚式の祝飾り・門神飾り・カーテン飾り等を見ると、地域の人々のありのままの生活の様子が見て取れます。毎年、春節になると、村人たちは窓に白い紙を貼り、その上に赤い紙の剪紙を貼って窓飾りとして新年を祝います。12月は農閑期なので、延川地域の女性たちは一堂に会し、お互いに剪紙の模様を教え合い、誰が上手に出来るか競争しながら剪り方を学びます。お正月には、お互いの家を訪問し合い、何処の家の窓飾りが良く出来ているか、何処の家の嫁が剪紙を上手につくるか、誰の剪紙が村人全体の尊敬を受けることが出来るかなどとあちこちで勝手に品評会を開きます。

黄土高原に住む人びとは、生まれると直ぐ、如何にして「腹を満たすか」と言う大きな問題を抱えており、そのことで一生苦労します。自然環境が厳しい分、都市部に住む人びとと比べて、精神的にも肉体的にも苦労が多いといえます。陝北の人々は、「生」を大事と考えます。彼らはしばしば「仔豚でも三升の糠を持って生れて来る」と言いますが、その

意味は「どんな命でも皆生きる権利がある」と言うことです。そうは言っても、黄土高原での生活は苦勞が多くて大変でした。水汲みにしても、今でこそポンプが普及してモーターで高いところまでくみ上げていますが、昔は険しい崖を下って川まで水を汲みに行きました。そんな中で、人々は剪紙に心の慰めを見出していました。厳しい生活に疲れた時

は、剪紙で美しい花々や、楽し気な情景を切り出して心を楽しませ、天災や病魔に襲われた時は、剪紙に招魂や厄除けを祈り、富と栄光に恵まれた時は、剪紙を通して、変わらぬ神のご加護を願いました。

つまり、黄土高原に住む人びとは、嬉しいにつけ、悲しいにつけ、剪紙と共に生活して来たと言えるでしょう。

中国の笑い話 33 (「365夜笑話」より)

翻訳：有為楠君代

第107話：質問に答える

地理の時間に、先生が小張に訊いた。

先生「黄河の水源はどこかね？」

小張「天上です」

先生「どうしてそう思うんだね？」

小張「詩人李白は、彼の詩の中で、『黄河の水は天上より来たりて、海へ滔々と流れ下って、再びかえらず』とっています」

第108話：二郎山が最高峰

地理の試験の時「我が国で一番高い山は何というか？」という問題が出た。小勇は、迷わずに「二郎山」と書いた。試験の講評の日、地理の先生は小勇に訊いた。

先生「授業の時、我が国で一番高い山はチョモランマで8848.13m、これは世界一の高さだと話しましたが、覚えていませんでしたか？」

小勇「よく覚えています。でもわらべ歌では『二つとせ…、二郎山^注のたかさは一万丈……』と歌います。計算すると、一万丈は約30000m以上ですから、これはエベレストよりずっと高いと思いました」

(※1丈≒3m)



「歌唱二郎山」の石碑とトンネル。二郎山は、四川省の山。毛沢東紅軍「長征」の難路。今はトンネルで難なく通れる。(写真、百度百科より) YouTubeは、
<http://www.youtube.com/watch?v=O9IP820nVSg>

第109話：漢水の源はどこか？

地理の先生が話した。

先生「前の授業で長江の位置といくつかの大きな支流のことを話したね。それでは一つ質問するよ。

長江の支流・漢(水はどこを源としているかな?)」

多くの生徒が、答えようと手を挙げているのに、生徒の一人が先生に指されないように俯いていた。その生徒は、ほんやりとほかのことを考えていたので、先生の質問を聞いていなかったのだ。ところが先生は彼の名前を呼んだ。彼は急いで立ち上がったが、頭から汗が滴り落ちた。彼が何も答えないので、先生はもう一度訪ねた。

先生「漢水(汗水と同じ発音)の源はどこだね？」

生徒「汗水の源は頭髪の中です！」

第110話：道理で、毎日転ぶんだ！

お兄ちゃんは地理の時間に、地球の形や、公転・自転のことも習った。お兄ちゃんはすぐに、4歳半の弟に地球が丸いことを話して聞かせた。すると弟は、直ぐに納得して言った。

弟「そうか！ 僕が歩いていてすぐ転ぶのは、そのせいだったんだね！」

第111話：道三日月の上は混み合う

地理の時間に先生は月の表面の様子を話した。先生「月の表面はとても広いので、数百万の人々がゆったりと暮らせるんだ」

その話を聞いて、小さな男の子マイクは笑い出した。

先生「何がおかしいんだい？」

マイク「毎月、月が三日月になると、月の上はすごく混むだろうと思いました」

スリランカ史を紐解くと栄華と混迷の物語がある。その歴史は仏教と切り離せない関係である。ことに、上座部仏教¹⁾の原点はスリランカにある。それを証する仏跡が各地に点在している。釈迦の遺骨の一部である仏歯が歴代の王宮に祀られていたという点からも上座部仏教の原点であると裏打ちできよう。シンハラ王朝が16世紀頃までに南下を繰り返して廃都になっていった遺跡群、中でもヤーパフワ(1272～1284)に遷都した12年間に私の密かな好奇心はそそられていた。そんな隠れたスリランカ観光名所を、2016年10月14日に訪れた。

🌸10ルピー札の妙味

「ほら、見て!! ダンバデニヤの跡だよ」「クルネーガラの大仏さまが見えてきたよ」と、車の助手席でタランガッレ・ソーマシリ師が指差した。せめて遷都の跡の空気だけでもと思い、静かな田舎道路や椰子並木、喧騒の街通りを走り続けた。ヤーパフワはコロomboから120kmの辺りに在り、マーホという小さな町の近郊である。日本人の旅行者によれば、ミヒンタレーやハバラナの観光後、まだ時間が余っているから寄ってみよう…という程度の観光地である。兎も角、私はそのようなことにおかまいなく、参拝したかった。朝、早くガンパハを出てヤーパフワに向かう車の中でソーマシリ師が話してくれた簡略史を、頭の中で思い巡らせた。シンハラ王朝がアヌラーダブラに築かれたのは紀元前377年、仏

教伝来は紀元前247年である。南インドで勢力を拡大していたチョーラ王朝に、10世紀末頃征服された。その後、首都がポロンナルワに移された。仏教の普及に力を注ぎ僧院が建立され、アジア随一の仏教都市として発展を遂げた。やがて、南インドのバーンディヤ王朝の権力闘争に破れ、ポロンナルワ時代の終焉を迎えた。都をダンバデニヤに移転、更にヤーパフワ、クルネーガラ、ガンポラとシンハラ王朝の首都は南下して行った。シンハラ王朝最後の都で16世紀末に辿り着いたのがキャンディである。イギリスの植民地となった1815年までの300年間、首都として繁栄した。同時に王権の象徴である仏歯を祀る仏歯寺²⁾が建立され、今日もスリランカの仏教徒の厚い信仰を集めている。車の後に座った私は、水田沿いの風景に視線を向けながら、遷都を繰り返した王朝の背後に何があったのかと考えた。 Deng熱やマラリヤなどの流行、気候異変、水災害や土壌の疲労など天災が主因であろう。勿論、経済悪化に伴う王権の弱体化、国の管理機構が崩壊していったことも原因の一つである。してみると日本の自然災害等にも同じようなことが云えよう。異なるのは、スリランカ北部の乾燥地帯から湿潤地帯に移動していったことで、仏教寺院と王宮、貯水地等が遺棄されてしまったことである。各遷都に共通するのは「岩山」(ロック)であり、王宮を要塞化し潜伏所として自分たちの身を守るために造った点にある。

2010年4月5日デノミネーションで紙幣がコインになったと聞いているが、そもそも、今は参拝者も少なくなっているヤーパフワへ向かった動機はスリランカの10ルピー札である。2016年度の今日も使用されているが、その紙幣の裏側に描かれているのは、ヤーパフワ遺跡の石段にある



ヤーパフワ遺跡の石段にあるライオン像
(グーグル・パノラミオから)



仏歯寺 (ウィキペディアから)

「ライオン像」の彫刻で、このライオン像が私の中で肥大して行き是非とも見たいとの思いが募っていった。そろそろ目的地かしらと思うと、シーギリヤをコンパクトにしたような岩が見えた。

ヤーパフワはシーギリヤに比べて、少々地味で見劣りがしないでもないが、観点を変えれば趣は格別である。人伝に聞いていたよりは人の気配が多い気がする。ヤーパフワの遺跡はこの野原にどっかり座る石、石…? なのかしら? と思ったら車は止まった。カラフルに仏旗が舞って何処も彼処も清掃されている。この寺のご住職の采配が行き届いて、すみずみまで清潔感があり浄域らしい空気が流れている。それ丈ですっかり魅了されてしまった私に「ペラヘラ祭の前夜だから賑わっているんだよ」と、ソーマシリ師の言葉が入った。惹き付けられるように石段を上ると、チケットオフィスの前に、ブーゲンビリアの花々が活けられてあり心を奪われた。そこから見上げる石段は、急勾配である。「岩山の頂上まで険しくて道があるのか無いのか分からない。仏塔が残っているだけだからね」「その足で大丈夫かなあ? 無理だよ。無理!!」かつて私は健脚と云わ



スリランカ10ルピー札のライオン像。現在は10ルピーコインになって紙幣は流通していない。

(LovelyPlanetから転載<http://www.lovelyplanet.jp/index.html>)

れていたが、関節の手術後は3年間ものリハビリに明け暮れ、車イス生活も云々される程であった。幸いにして、海外旅行にも出れるようになった。スリランカに導かれたのは仏さまのお守りではないかと思える程である。直射日光を浴びながら蟹足で登り、休んでは登った。門や石柱の細かいデザインは東南アジアで眺めた彫り物や南インドのモチーフにもあった様に感じられた。カンボジアの遺跡にはヒンドゥ教の精巧な造りそのもののような印象であるから、国際交流、友好関係があったのであろう。ガードストーンには装飾が崩れずに残されており、キャディアンダンスのレリーフは生命感と躍動感にあふれている。小さな遺跡の中に、価値ある見所が沢山存在している。あちらこちらに眼を移動しながら私は興奮気味で、是非一見を勧めたい旧跡である。石段の真中辺でやっとユニークでコミカルなライオンと対面した。大きな目玉と大口を開いたライオンは、この先も険しいから気をつけてと云ってくれているのかしら? 折角此処まで来れたのだから、せめて石段の上までとがんばった。広場のような所に出た。そこから見晴す深緑や樹木の景観は言葉に尽せない雄大さがある。それにしても、どのようにして岩山の住人に食料を運搬したのであろうかと思い何気なく周囲を見廻した。と、この場所に「仏歯をご安置する建物」があったのか、私の仏を求める心に突然仏の声が語りかけて来た。その仏の声に古の人々の声なき声が重なり交差し私の中で反響する。初めての体験に私は呆然としてその場に立ち尽くした。ヤーパフワの廃墟の断片が語り部として、今も、私たちにスリランカの古を伝えている。

■注

1) 上座部仏教：チベット、モンゴルから中国、韓国、日本に東アジアに広まった大乘仏教に対して、インドからスリランカに伝わり、ビルマ、ラオス、タイ、カンボジアに広がった南伝の仏教。かつて小乗仏教と呼ばれたこともある。厳格に戒律を守り、仏教本来の伝統を継承し、悟りを得ることを目的としている。

2) 仏歯寺：ダラダー・マーリガーワ寺院(英語:Temple of the Tooth)は、仏教聖地であるスリランカのキャンディに位置する寺。釈迦(仏陀)の犬歯(仏歯)が納められているとされる。

〈講演〉「論語」から学ぶ言葉の力 参加者：25名

2017年7月23日(日) 川崎市・麻生市民センター 講師：植田渥雄先生

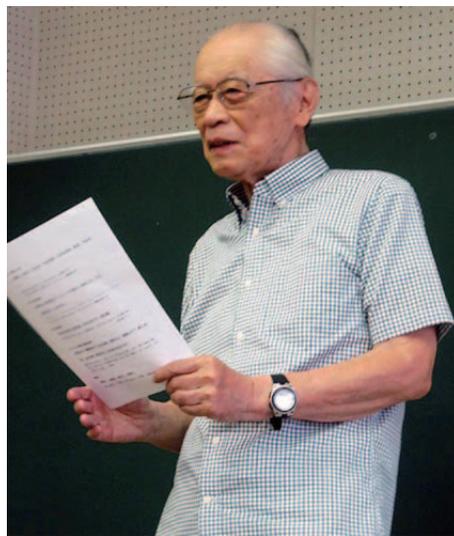
「あさおサークル祭」が、今年も7月23日に川崎市・麻生市民センターで開かれました。‘わんりい’として昨年に引き続き、植田渥雄先生による「論語」の講演がありました。参加者はおよそ25名で、皆さん先生の話される論語の世界にじっと聞き入っていました。論語は、いわゆる四書五経と言われる古典で儒教の教書である四書(大学・中庸・論語・孟子)の中の一つであり、全20篇、約500の短文から構成されています。私は若いころから断片的にそこに書かれている言葉を聞かされてきて随分身近に感じていました。しかしいざその中に入っていくと難解な文章ばかりで、今回講演に参加して改めて難解だと感じましたが、日本人の心にも響くのはなぜか、を少し理解することができました。

前置きが少し長くなりましたが、今回は『「論語」から学ぶ言葉の力』と題してお話しされました。全容をご報告するには紙面がとても足りませんので、その一部を紹介することでご報告に替えさせてい

たきます。

まず、人間の最も重要な道德と儒教が位置付けている【仁】から講演が始まり、仁に関する三つの文を次のようにあげられお話しされました。

- ① 巧言令色鮮矣仁、
qiǎo yán lìng sè xiǎn yī rén
- ② 剛毅木訥近仁、
gāng yì mù nè jìn rén
- ③ 仁者其言也切
rén zhě qí yán yě qiè



ユーモアを交えながら孔子の言葉をわかりやすく説明する植田講師

最初の文はよくご存じと思いますが、巧言令色とは「言葉をうまく飾り、顔をうまく取り繕う」ことですね。孔子はこのような人は仁が少ないと言っています。「鮮」は少ないと同義語。③の「訥(讒)」という漢字は口が重いことを言うそうです。

この三つの文からは、「巧言令色する人よりは、口下手(剛毅)でもしっかりした意思(木訥)を持って発言する人が仁に近いの

だ」と弟子に教えます。多弁をよしとしていないのです。仁というイメージは、なかなか難しい概念ですが、植田先生からは要は「人間らしい姿」と理解したらいいのでは、と教えられました。これらを踏まえてさらに植田先生はいくつかの文を示されながら、孔子は「言葉を発したらそれに伴う責任ある行動が必要であること。そして言葉を発する時は相手や時を選んで行わねば意味がない」と言っていると話しされました。政治家の皆さんにご覧いただきたい文章ですね。

講演は1時間半に亘るため途中質問時間が持たれましたが、次々に質問が出され、それらの質問がまた論語の理解を深めるのに役立ったと感じました。



講師の話に集中する

講演は資料の最後に書かれた、〈衆悪之、必察焉、衆好之、必察之〉の文を次のように説明され終了しました。〈文意＝皆が嫌うことも、その根源を見る必要がある。皆がいいと言ってもやはりその真実は見極めなければならない。〉

植田先生の「この文はポピュリズムのことを今から2500年前の孔子は見透していたんだね」との解説に皆納得しながら散会しました。

(報告：寺西俊英)

◆あさおサークル祭り報告

ボイス・トレーニング 参加者：16名
2017年7月23日(日) 川崎市・麻生市民センター
講師：Emmeさん

今年のあさおサークルまつりも、‘わんりい’講座(月1回開催)「ボイス・トレをして日本の歌を美しく歌おう! 会」講師・Emmeさんのボイストレーニングの公開講座で参加し、16名の参加がありました。快活なEmmeさんのご指導のもと、軽くストレッチ体操をした後、滑舌を良くするために舌、口元、顔の筋肉をほぐす運動をし、日頃出した事もない超低音から超高音までの発声練習をした後、「夏の思い出」(江間章子作詞・中田喜直作曲)を情感豊かに歌いあげました。初めて体験した方がほとんどで、皆さん楽しかったとの感想で、表情が緩んでお帰りになってように感じました。(報告：鈴木千佳子)



声を出すためにはまず体を解きほぐす。麻生市民館・視聴覚室は広いので伸び伸びと準備体操をする(中央がEmme講師)

◆‘わんりい’活動報告

コープみらい活動交流会

2017年7月29日(土) 東京都中野区・コーププラザ新中野にて

7月29日、コープみらい東京都本部が主催する「2017年度東京エリア社会貢献活動助成金活動交流会」が、「コーププラザ新中野」で開催されました。

コープみらいは、地域の市民活動を活発にする目的で、2015年に「(一財)コープみらい社会活動財団」を設立し、財団と共催で様々な団体を「地域クラブ」として認証し、活動を援助する他、「コープみらい地域かがやき賞」を設けて地域の活性化、文化向上、環境保全に功績のあった団体を顕彰しています。‘わんりい’もこの「地域クラブ」に登録しており、これまでの活動が認められて、上記「地域クラブ輝き大賞」を2015年度受賞しました。

コープみらいは、毎年活動分野の異なる団体の交流を促すために交流の場を設けており、今年は、2015年度と2016年度の上記受賞団体・18団体35名が参加、‘わんりい’からも5名の会員が参加しました。

2016年度の受賞団体の内3団体による活動発表の後パネルに活動の様子を写した写真を掲示し、会を代表して寺西俊英さんが、わんりいの活動の概要を紹介しました。

沢山の団体と情報交換や和やかな交流が出来て、有意義な会合でした。



‘わんりい’の活動を紹介する寺西さん

料理講座 **ベトナム留学生・タンちゃんのレシピで交流**

2017年7月17日(祝) 麻生市民館・料理室

鈴木真佐世

ベトナムから大東文化大学に留学していたファム・クオック・タンさんからベトナム料理を教えてもらって早15年になる。改めて歳月が過ぎてゆく速さにびっくりだ。

我が家には会が活動を始めて以来のレシピのファイルが何冊もあり、当初は現地から来日された皆さんを講師にして、日本風にアレンジしない現地そのままの味を紹介いただいた。繰り返し作っているうちにそれらの料理がいつの間にか我が家の定番になると同時に、その都度自分流の思い付きが混じって本来の味とはだいぶ隔たりができてしまっている。一度原点に戻ってきちんとレシピを整理したいと思っていた。早稲田大学院に進学以来なかなか会える機会がなかった顧傑さんを加えて10名が参加した。

予定のメニューは、①フォー・ボ(牛肉のフォー) ②生春巻き ③鶏肉のレモングラス炒め ④青いパイアのサラダ ⑤バナナ チェー(バナナのココナッツミルク煮 タピオカ入り)ということで決めた。

ベトナム料理は新鮮野菜を多用するのでさっぱりとして日本人好みの料理だが、野菜をやたらに切り刻む。「生春巻きに入れるレタスもキュウリもマッチ棒のようにね」「鶏肉のレモングラス炒め煮に使うレモングラスはゴマ粒のように切ってね」「青いパイアのサラダに使うパイアも人参もできるだけ細く」「ベトナム万能調味料に入れるにんにく、レモンの皮は、超みじん」…。参加者皆で手分けしてそれぞれを切った。生春巻き、鶏肉のレモングラス炒め、青いパイアのサラダは好評だった。

しかし、肝心の、ベトナム料理の目玉の筍のフォー・ボがいけなかった！

フォーは出汁が決め手というタンちゃん言葉に従って、出汁を取る為の豚の軟骨及びほかの料理材料調達で、はるばるアメ横まで出かけて揃えた。前日、2kgのブタの軟骨を2時間煮て出汁を取っ



準備はひたすら野菜を刻む



お皿に並べた生春巻き材料

た。「うーむ、なかなかいけるわい」というのがその時の感想だった。

誤算は、一人分ではなかったこと。しゃぶしゃぶの季節ではなかったのでしゃぶしゃぶ用の薄切り牛肉が地域のスーパーでは扱ってなかったことだ。つまり、出汁は大鍋にぐらぐらに煮立たせてあったものの、どんぶりが厚手で熱を吸収したこと、人数が多く、お湯にくぐらせたフォーを取り分けるのに時間がかかったこと、牛肉に厚みがあってスープの熱が一気に肉に通りにくかったなどなど…で、ベトナム屋台のキレの良い味にできなかった。フォーは、出汁ばかりでなく瞬時の手際が味を決めることを知った。再挑戦に期待してほしい。

それでも、和気あいあいとテーブルを囲んでランチタイムを楽しんだ。

(報告：田井光枝)

◆わんりいの講座 **中国語で読む・漢詩の会**

漢詩で磨く中国語の発音！中国語のリズムで読んで漢詩の素晴らしさを味わおう！！

▲まちだ中央公民館 10:00～11:30

9月24日(日) 第3・4学習室

10月15日(日) 第3・4学習室

▲講師：植田渥雄先生

(桜美林大学名誉教授、
現桜美林大学孔子学院講師)



▲会費：1500円(会場使用料・講師謝礼など)

▲定員：20名(原則として)

*録音機をお持ちの方はご持参下さい。

◆申込み：☎090-1425-0472(寺西)

E-mail:ukiuki65@yahoo.co.jp(有為楠)

◆わんりいの講座 **ボイストレーニングをして日本の歌を美しく歌おう！**

あなたも私も笑顔が美しくなる！身体力を抜いて、気持ちよく発声しよう！！

●9月26日(火)10:00～11:30

練習曲「浜辺の歌」「小さな秋見つけた」

まちだ中央公民館 視聴覚室

●10月31日(火)10:00～11:30

町田市民フォーラム4F学習室1(A・B)

★動きやすい服装でご参加ください

●講師：Emme(歌手)

●会費：1500円(会場使用料・講師謝礼など)

●定員：15名(原則として)

◆申込み：☎042-735-7187(鈴木)

E-mail:wani@jcom.home.ne.jp(わんりい)



講演会 **中国水墨画の栄光と歴史**

入場無料

中国の水墨画って日本の水墨画とはどこが違う？文人画とは？「気韻生動」とは何か？満柏氏がスライドを使って分かりやすく説明

●9月28日(木) 開場9:30 開演9:50

●横浜市吉野町市民プラザ4F ホール ☎045-243-9261

〒232-0014 横浜市南区吉野町5-26 <http://yoshinoplaza.jp/>

横浜市営地下鉄「吉野町」下車 ④出口を出て、右方向に徒歩3分

●問合せ：日中水墨協会 ☎045(664)3789



中国水第13回 **日中水墨協会展**

入場無料

水墨画原点「気韻生動」を追求した日中両国の個性あふれる作品100点を展示予定

●2017年9月27日(水)～10月1日(日) 10:00～18:00(最終日17:00)

●横浜市吉野町市民プラザギャラリー ☎045-243-9261

●問合せ：日中水墨協会 ☎045(664)3789

■満柏プロフィール

1965年、中国の遼寧省生。祖父、母親は共に中国の著名な画家。中国の美術大学を卒業後、1988年、来日。日本の大学に入学し、日本文化思想など学ぶ。1996年から1999年、横浜市林光寺の天井画と障壁画を描く。1996年中国水墨画で「日本の自然を描く」展を開催。個展及びグループ展開催多数。水墨画・書の傍ら、美学芸術論を研究し、独自の美学論芸術論を唱えている。

- 日中水墨協会会長 ■中国水墨芸術家連盟常務理事
- 全日中展審査員 ■東京中国書画院常務理事 ■日本華僑華人文学芸術家連合会理事 ■「水墨之友」編集委員
- 美術大学非常勤講師。

初心者のための体験のお誘い

【鶴川水墨画教室】

●講師：満柏(日中水墨協会・会長)

●場所：鶴川市民センター

(町田市大蔵町1981 駐車場有)

小田急線鶴川駅からバス

「鶴川市民センター入口」下車

●曜日・時間：14:00～16:00

毎月第2、第4(月)

●体験参加費：1000円
(見学無料/手ぶらで参加可)

●問合せ：野島

☎042-735-6135



(公財)日中友好会館&貴州省観光発展委員会 主催

第27回 中国文化之日

入場無料

多彩貴州「貴州少数民族歌舞公演」 前売り1,000円(全席指定)

- 日時:10月28日(土)11:00~/15:00~ 29日(日)11:00~/15:00~
全4回公演(30分前に開場、上演時間は1時間程度)
- 会場:日中友好会館地下1階大ホール

「e+イープラス」<http://eplus.jp>(PC/携帯共通)にて9月1日(金)より前売開始
ファミリーマートのチケット購入機でもチケットを購入可

- 貴州少数民族衣装展・茅台酒の故郷—^{フォンシュエミン}馮学敏「貴州風情写真展」
会場:日中友好会館・美術館

10月14日(土)~29日(日) 10:00~17:00(27日14:00まで)



中国南西部に壮麗な大自然を有する貴州省は、少数民族が多く住む秘境です。少数民族の芸術は美しい自然環境での暮らしから生まれました。日々の暮らし、恋愛、伝説などをロマンティックに、独特な方法で表現しています。「多彩貴州」の公演は貴州省凱里学院音楽学院の学生が来日し、ミャオ族の民族歌舞や伝統楽器の演奏など多彩な演目で楽しめます。

展覧会は、貴州に暮らす少数民族の衣装や銀の飾り物などのほか、著名在日中国人写真家・馮学敏氏の貴州風情写真も展示。中国奥地の多彩な伝統文化をご堪能下さい。



「ミャオ族村へようこそ」馮学敏撮影

日中友好正常化45周年記念 中国景德鎮陸如師徒陶器及び書画作品展

場所:日中友好会館・美術館

入場無料

2017年9月12日(火)~17日(日)

10:00~17:00(初日15:00/最終日12:00)

■陸如・プロフィール:1936年、中国江西省豊城市に生まれる。国家陶磁芸術大師。中国工芸美術学会会員。父 陸雲山(1904~1974)は景德鎮の近代陶磁の名家として評判高い。陸如氏は中国画の伝統技法を陶磁器絵画に融合し、染付の花鳥陶磁筆の赴くままに自在に描き、詩書画一体の境地に至っている。

- 主催:中国文化芸術博覧会組委會・他 ●問合せ:080-3136-4645



浙江省文化年・第四弾 浙江省農民・漁民画展

場所:中国文化センター 2017年8月29日(火)~9月8日(金)

(土・日休館日10:30~17:30 最終日13:00)

農民・漁民画は、庶民が本業の傍らで自由に描く絵画で、決して技巧性や写実性はないが、力強くも優しい線や、鮮やかな色使いが特徴的な民間絵画です。絵のモチーフとなっているのは、庶民の趣味や、日常風景、伝統芸術などで、農村や漁村に息づく生き生きとした風景を素直に表現し、どこか懐かしくて温かい親しみがある。今回の展覧会では、農民・漁民画の制作が盛んな浙江省の農民・漁民画60枚余りを展示。

- 主催:浙江省文化センター、中国文化センター 共催:浙江省文化館
- 問合せ:東京中国文化センター ☎03-6402-8168

「中国を知る会」主催 講演会「和華」で日中草の根交流

<https://ja-jp.facebook.com/%E5%92%8C%E8%8F%AF%E6%97%A5%E4%B8%AD%E6%96%87%E5%8C%96%E4%BA%A4%E6%B5%81%E8%AA%8C-174996036037338/>

講師：孫秀蓮氏 日中文化交流誌『和華』・編集長

入場無料

- 日時：2017年9月24日(日) 14:00～15:30
- 会場：町田市民文学館ことばらんど 大会議室 町田市原町田4-16-17 ☎042-739-3420
https://www.city.machida.tokyo.jp/bunka/bunka_geijutsu/cul/cul08Literature/

講師プロフィール

孫秀蓮 sūn xiùlián：1986年、中国山東省臨沂市に生まれる。済南大学日本語学科を卒業後、2009年に来日。京都大学などを経て、2013年4月、滋賀大学大学院に進む。同年10月、「民間の皆さんと力を合わせて中日の草の根外交を目指したい」との思いから、居酒屋で稼いだアルバイト代をつぎ込み日中文化交流誌『和華』を自費で創刊した。雑誌名『和華』には、日中間に「平和」の「華」を咲かせ、交流の「輪」を広げたいとの思いが込められている。その原動力は「日本が大好きな純粋な気持ち」とのことだ。2015年3月、滋賀大学経済学研究科前期博士課程修了。現在は、出版社アジア太平洋観光社で、日中の文化交流誌『和華』を編集制作担当の編集長であり、同社の文化事業マネージャーも務める。



『和華』は年4回発行の季刊誌だが、毎号テーマを決めて日中の文化紹介をしており、『人民網』、『朝日新聞』、『読売新聞』など日中両国の主要メディアにも取り上げられた。

◆申込：床呂英一、E-mail：m-tokoro@mta.biglobe.ne.jp ☎090-1439-4348

わかち合うシンフォニー! 文化庁芸術祭主催公演

第72回 アジアオーケストラ ウィーク 2017 <http://www.orchestra.or.jp/aow2017/>

アジア オーケストラ ウィーク (AOW) は、アジア太平洋地域から国々を代表するオーケストラを招き、演奏と共に各国それぞれの豊かで多様な文化と伝統を我が国へ伝える

会場：東京オペラシティ・ホール <https://www.operacity.jp/concert/>

- 上海フィルハーモニック管弦楽団(中国) 2017年10月5日(木) 19:00開演
芥川也寸志：弦楽のための三楽章「トリプティック」/ショパン：ピアノ協奏曲 第2番 へ短調 作品21
ドヴォルザーク：交響曲 第8番 ト長調 作品88
- マレーシア・フィルハーモニー管弦楽団 2017年10月6日(金) 19:00開演
武満徹：弦楽のためのレクイエム/ベートーヴェン：ピアノ協奏曲 第5番「皇帝」変ホ長調/ヴィヴィアン・チュア：栄光の頂点(2017年マレーシア・フィルハーモニー管弦楽団委嘱作品)/ベートーヴェン：交響曲 第7番 イ長調 作品92
- 関西フィルハーモニー管弦楽団(日本) 2017年10月7日(土) 16:00開演
ショーンソン：詩曲(弦楽合奏版)/ラヴェル：ツィガーヌ(弦楽合奏版)
マスネ：タイスの瞑想曲/ビゼー：交響曲第1番 八長調

▲チケット：全席指定 税込

S: 3,100円 ペア券(S席2枚): 5,000円 A: 2,060円 B: 1,030円
3公演セット券 S: 7,000円 A: 5,000円

▲チケット申込み：日本オーケストラ連盟 ☎03-5610-7275 (平日10:00～18:00)
東京オペラシティチケットセンター ☎03-5353-9999

【9月定例会開催日及び7月号おたより発送予定日】 ◆問合せ：☎042-734-5100(わんりい)

- 9月の定例会：9月15日(金) 13:30～三輪センター・第3会議室、定例会はどなたでも参加できます。
- 10月号おたより発送日：9月29日(日) 10:30～ ●場所：三輪センター・第3会議室

※ おたより発送日はお弁当を持参ください。

月餅を手作りできるって本当!? 美味しい手作り月餅の会

指導：有為楠君代



● 2017年9月23日(祝) 11:00 ~ 15:00 ● 場所：麻生市民館・料理室
小田急線新百合ヶ丘駅北口徒歩3分

▲当日の流れ

11:00 ~ 12:00 月餅の皮と餡の準備 12:00 ~ 13:00 昼食(簡単な弁当をご持参ください)
13:00 ~ 15:00 月餅の成型・焼き。焼き上がった月餅でティータイム

- 参加費：1500円(会場費・材料代) ※定員：先着15名(申し込み締め切り：9月15日/金)
- 持物：エプロン、筆記用具、自分用の布巾
- ◆ 申込みと問合せ：☎ 042-734-5100(わんりい) E-mail: wanli@jcom.home.ne.jp

10年近く前に山西省太原出身の何媛媛さんに、手作り月餅の作り方を指導いただいてから、毎年9月の中秋前後、手作りの月餅講習会が「わんりい」の恒例の料理講座になりました。月餅作りをすっかりマスターされた有為楠君代さんが指導くださいます。月餅は餡を包んだ焼き菓子ですが、作り方が分れば自分好みの月餅を作ることができますね。月餅独特の模様を入れるには月餅の型が必要なのですが、そこは工夫とアイデア次第で、敢えて月餅と名付けなくとも自分流のオリジナルの焼き菓子になるのではないかと思います。焼きたての月餅を食べる機会です。お土産も付く筈ですから、お家に帰られてからも楽しめます。皆様のご参加をお待ちしています。



■ 桜美林大学の交換留学生として韓国へ1年間留学していた、マレーシア人留学生ジェイソン・プアさんが日本に戻られました。早速、ジェイソンさんをお願いしてマレーシアの料理を紹介頂きながら作り方を教えていただきます。10月1日(日) 町田中央公民館・料理室です。是非ご予約ください。
問合せ：☎ 042-734-5100 E-mail: wanli@jcom.home.ne.jp

外国人との交流広場 お茶会 9月の国 スリランカ

さがみはら国際交流ラウンジは、毎月外国から来られている方々を招いてその国の紹介と交流会を開催しています。9月はスリランカです。大学で学んでいるスリランカ人学生と為我井輝忠氏をお招きして、お話していただきます。

- 9月17日(日) 10:00 ~ 12:00
- 会場：ユニコムプラザさがみはら 実習室1
<http://unicom-plaza.jp/access/>
(小田急線相模大野駅北口1分 ポーノ相模大野サウスモール3F)
- 参加費：100円(参加希望者は直接会場へ)
- 主催：さがみはら国際交流ラウンジ
- 問合せ：TEL & FAX 042-750-4150)

【'わんりい'の原稿を募集しています】

'わんりい'は、2月と8月を除く毎月発行の当会の会報です。主として、会員と会の関係者の皆さんの原稿でまとめられています。海外旅行で体験された楽しい話、アジア各地の情報やアジア各地で見聞した面白い話などを気軽にお寄せ下さい。又会の活動についてのご希望やご意見及び'わんりい'に掲載の記事などについても、ご感想をお待ちしています。

日中文化交流市民サークル 'わんりい'

'わんりい' 226号の主な目次

「寺子屋・四字成語」雑感(5)老馬識途	2
論語断片(29)法語の言は、能く従うこと無からんや	3
大連・鞍山・本溪の旅(その2)	4
混迷の時代を拓くザメンホフの人類人主義(16)	6
東西文明の比較(17)	8
「漢詩の会」報告(14)虞美人・春花秋月何時了(李煜)	10
高鳳蓮の生い立ち-1 陝北黄土高原の生活	12
中国の笑い話 33	15
スリランカ紀行20 私のの中のスリランカ遷都	16
あさおサークル祭報告・論語から学ぶ言葉の力・他	18
料理の会・報告 ベトナム料理で交流	20
わんりい掲示板	21・22・23・24

使用済み古切手と書き損じの葉書でご支援を!

日本スリランカ文化交流協会では、スリランカへの教育支援の為、古切手と書き損じ葉書を集めています。古切手は周囲を1cmほどを残して切り取り、おついでの方折に田井にお渡し下さい。